

遠藤周作の新発見資料「アフリカの體臭」について

杉 本 佳 奈

一、はじめに

二〇一六年六月三日、若き日の遠藤周作がペンネームを用いて発表した「アフリカの體臭——魔窟にいたコリンヌ・リュシエール——」という短編小説が発見されたことが、「産経新聞」一面で紹介された。本作の物語の大枠は、フランス留学の途上でジブチを訪れた日本人の「僕」が、

終戦後に肺病でこの世を去ったフランスの女優・コリンヌ・リュシエールが実は生き延びてこの地で娼婦となっているという噂を耳にし、娼館を訪れるというもの。「オール讀物」一九五四年八月号に「伊達龍一郎」という名義で掲載された作品であるが、現在は加藤宗哉編『『沈黙』をめぐる短篇集』（慶應義塾大学出版会 二〇一六年）に収録さ

れ、手軽に読むことができる。

最初の報道記事には、「遠藤周作幻の処女小説 31歳、別名義で短編」と見出しが付けられ、「『オール讀物』昭和29年8月号に別名義で発表された遠藤周作の小説「アフリカの體臭」＝東京都千代田区の文芸春秋（早坂洋祐撮影）のキャプションが付された写真が掲載されている。本文は以下のとおりである。

「沈黙」「深い河」などの小説で知られる遠藤周作（1923～96年）が作家デビュー前に別名義で発表した『幻の処女小説』があり、本人の作として新たに単行本に収められることが2日、分かった。新進批評家だった31歳のときの娯楽色の濃い短編で、人間の悪

や悲しさを見つめた遠藤文学の萌芽がある。15日に刊行される「遠藤周作『沈黙』をめぐる短篇集」（慶応義塾大学出版会）に収録される。

この作品は小説誌「オール読物」（文芸春秋新社）の昭和29年8月号に伊達龍一郎名義で掲載された「アフリカの体臭―魔窟にいたコリンヌ・リュシエール」。遠藤の処女小説とされる同年11月発表の「アデンまで」より前に世に出ている。「アフリカの―」は原稿用紙換算で約20枚。戦後若くして病死したフランスの女優コリンヌ・リュシエールが実はアフリカのジブチで売春をしながら生きているという話を聞いた男たちが、彼女を探し求める過程で目にする衝撃の光景を描く。かつての人気女優の生の悲しみなどが伝わる一編だ。

遠藤は生前、作家の北杜夫さんとの対談で『オール読物』に伊達龍之介とかなんとかいう変名で、読みものを何回か載せてる」と語っていた。この発言を知った町田市民文学館の学芸員が日本近代文学館の蔵書から発掘。弟子の作家で元「三田文学」編集長の加藤宗哉さんが調査し「フランス留学の体験が投影され、文体も若き日のものと同じ。遠藤の小説とみて間違

ない」と判断した。遠藤の著作権を継承する遺族も本人の作と確認したという。当時、新進批評家だった遠藤がアルバイトで書いたとみられる。

加藤さんは「すでに後の人気作家のストーリーテリングの才覚が十分に見て取れる。人間の悲しさや悪の問題など後に続くテーマもうかがえて興味深い作品」と話している。

引用文中に出てくる「町田市民文学館の学芸員」が筆者のことである。「産経新聞」の記事を受けて共同通信社から電話取材があり、その後全国各紙で同様の内容が報道された。本稿では、この発見の詳しい経緯と、関連する周辺事項についてまとめた。

二、発見の経緯

きっかけは、筆者が町田市民文学館の企画展として担当した「遠藤周作『侍』——『人生の同伴者』に出会うとき」展（会期：二〇一四年一月～三月）の準備中、遠藤資料の蒐集家である一田佳希氏から寄せられた情報であった。「狐狸庵V S マンボウPART II」（講談社 一九七五年）所収の北杜夫との対談にて、遠藤が、若い頃に別名義で書

いた作品が雑誌に掲載されたことがある、という発言をしていると教えていただいたのである。そこには、「おれも「オール読物」に伊達龍之介とかなんとかいう変名で、読みものを何回か載せてるんだ。ちゃんと一篇の短篇にはなってるんだけど。あれを集めると、かなり凝った小説もあるんだけどなあ」とある。また、それとは別に、「遠藤周作文庫」の『聖書のなかの女性たち』（講談社 一九七五年）の大橋直矢氏による解説中にも、「戦前からすでに有名な大衆雑誌A誌」に遠藤が「島津貴之介」というペンネームで書いた読み切りの娯楽小説が掲載された、と書かれているということも教えていただいた。遠藤周作が書きながら、それとわからずに未だに日の目を見ていない小説があるということ。これが見つかればひとつのトピックとして展覧会で紹介できると考え、調査を開始した。

「伊達龍之介」の方は雑誌名が明言されているが、「島津貴之介」の方もおそらく同じ「オール読物」だと推測できるので、その頃の「オール読物」の現物に当たることにした。当時の大衆文芸誌は読み捨てられて多くは残っていないものだが、日本近代文学館には古いものから所蔵されていることがわかり、足を運んだ。調査方法としては、一冊ずつページをめくり、目次にそれらしいペンネームがない

かチェックしていくという単純なもの。掲載されている可能性が高いのは戦後のものと思われたが、念のため戦前のものから目を通しておこうと、一九四一年一月号（第十一卷第一号）からの号を調査対象とした（なお、遠藤は一九四一年四月に上智大学予科甲類に入学、同年十二月に校友会雑誌「上智」第一号に論文「形而上的の神、宗教的神」を発表している。これが初めて世に出た遠藤の著作物である）。そこから戦前発行された一九四四年四月号（第十四巻第四号）までの号（一九四三年九月号から一九四四年四月号までは誌名が「文藝讀物」に改題となっている）と、戦後復刊した一九四五年十一月号（第十五巻第一号）から一九四六年二月号（第十六巻第二号）には、それらしいものは見当たらなかつた。この辺りまでの号は当然ページ数が少なく、一冊当たり六十五ページ前後、掲載されている小説も五、六編程度でいづれも当時の人気作家の作であり、無名の新人の作品が掲載される余地はなかつたと言っている。一九四六年十月号（第一巻第一号）からは文藝春秋新社発足に伴って巻号が改まっている。一九四九年に入り次第に雑誌自体のページ数が百ページ程に、翌年には二百ページ弱、一九五一年からは三百ページ程度まで増え、掲載される小説の数も十五編ほどにまで上っている。一九五

二年には「オール讀物新人杯」（後のオール讀物新人賞）が創設されるが、この頃から新人の作品も積極的に掲載されるようになってきた印象があり、期待が高まった。

地道に作業を進めていくうちに、それらしい作品が目に残まった。遠藤の発言にあった「伊達龍之介」ではなく「伊達龍一郎」という作家名ではあるものの、冒頭を読んでみると遠藤によるものではないかと思える内容であった。この「アフリカの體臭」は、「一九五〇年、六月二十八日朝、僕らのつてある佛蘭西船、ラ・マルセイエーズ號は、アフリカの南端、ジブチにつきました。」（本文引用は初出誌、以下同）という一文で始まるのだが、遠藤が同年、同名の船で留学先のフランスに渡っていることがすぐに思い当たったためである。展示会の監修を務めてくださった加藤宗哉氏にもお目通しいただき、内容からして遠藤によるもの間違いはないとお墨付きをいただいた。遠藤が初めて発表した小説「アデンまで」が「三田文学」に掲載されたのが一九五四年十一月であるが、「アフリカの體臭」はその三ヶ月前に雑誌に掲載されている。つまり、実は「遠藤周作」名で小説を発表する前に、ペンネームを用いた作品で小説家としてデビューしていたことになる。実際の執筆時期は不明だが、それ以前にエッセイ、評論を本名で発表し

ていた遠藤が、娯楽性の高い小説を発表するために別名義を用いたということである。なお、この前年に当たる一九五三年九月号の「文學界」にエッセイ「アルプスの陽の下」が掲載されていることから、ここで出来た文藝春秋新社の編集者とのつながりから、小説原稿を依頼された可能性が考えられる。

「オール讀物」は一九六〇年までの目次を調査したが、ほかに遠藤が変名で発表したと思われる作品は発見できなかった。

なお、同展示会では日本近代文学館からお借りした「オール讀物」の現物（展示可能な日数に限りがあるため、後期はパネル）を展示し、この発見を紹介した。

三、コリンヌ・リュシエールについて

「アフリカの體臭」に登場するコリンヌ・リュシエールは実在したフランス人女優である。一九二一年にパリで生まれた彼女は、十六歳で女優としてデビュー。出世作「格子なき牢獄」は一九三九年に日本でも公開、全国二百二十六の映画館で上映され、多くが四週間も続映されるほどの大ヒットとなった。さらに、封切後二カ月間で、コリンヌのプロマイドは外国人女優として当時最高記録となる十五

万枚売れたという。戦後、ナチス・ドイツの高官の愛人をしていたことで糾弾を受け逮捕されたコリンヌは、一九五〇年に結核により二十八歳の若さでこの世を去っている。

遠藤は、一九七七年一月二日にNHK教育テレビ「世界名画劇場」シリーズで「格子なき牢獄」が放映された際に、ゲストとして招かれている。鈴木明「コリンヌはなぜ死んだか」(文藝春秋 一九八〇年)によると、遠藤はこのときコリンヌのことを、「われわれの青春時代の象徴」というように評したという。コリンヌの名は、三浦朱門がインタビュー「わが友、遠藤周作を語る」(二〇〇三年八月刊『文藝別冊 遠藤周作』所収)で明かしたエピソードにおいても、美人の比喩として挙がっている。遠藤にとって、思い入れの強い女優であったことは間違いない。亀井勝一郎、円地文子、堀口大智、石川達三、河上徹太郎、窪川(佐多)稲子、神近市子などの当時の文学者も「格子なき牢獄」に賛辞を送っている。日本政府は、アメリカやイギリスとの戦争が始まった後もフランス映画に対しては寛容で、東京大空襲が始まってからも新宿や神田などで上映していた記録があるという。その美貌、清純さに多くの日本人が魅せられていたであろう。戦後になると上映作品はアメリカ映画に取って代わり、コリンヌのことは忘れ去られたが、

一九五〇年一月の訃報は日本の新聞で大きく報道された。

実は、遠藤は「アフリカの體臭」と同時期に、コリンヌを題材にもうひとつ短編小説を執筆している。桃園書房が発行していた「小説春秋」第二巻第十一号(一九五六年十一月一日発行)に掲載された「生きていたコリンヌ」である。本作の存在は「アフリカの體臭」が遠藤の手によるものだと裏付ける根拠のひとつと言えるが、石川巧が「雑誌『小説春秋』はなぜ歴史に埋没したのか?」(『敍説III』十号二〇一三年九月)において「全集や単行本に収録されたことがなく、これまでの研究史においても言及されたことがないと判断できる作品」のひとつとして指摘している通り、これまでの遠藤文学研究において俎上に載せられたことがないばかりか、掲載誌の稀少性も相まって現在では手に取るのも困難な作品である。前述のとおり、「アフリカの體臭」は別名義で掲載された作品であるが、「生きていたコリンヌ」は「白い人」によって芥川賞を受賞した翌年に、遠藤周作名義で発表されている。コリンヌ・リュシエールを題材とした作品を、約二年後に自らリライトしたことになる。コリンヌが実は生きているという情報を得た主人公が場末まで彼女を探しに出かける、という大枠は共通しているが、「生きているコリンヌ」は舞台が巴里になっている

など相違点も多くある。なお、掲載誌の挿絵はどちらも松田穰によるものである。

その時代の青年たちはこぞって彼女に熱を上げていたというから、「オール讀物」や「小説春秋」の読者にとつてもコリンヌ・リュシエールの名はなじみ深いものであったと思われる。また、「わが青春の女優たち」という特集でコリンヌのことを紹介した野坂昭如の「アルジェの果てまでも」（『文藝春秋』一九八七年八月号掲載）という文章によると、実際に一九五二年頃、コリンヌが実は生きており、「彼の地（引用者注…アルジェリア）で、娼婦の館の女主人になっている」という噂があったというから、これらの小説は読者の興味をそそる内容だったと言えるだろう。

四、作品の舞台について

「アフリカの體臭」の舞台であるジブチは、アフリカ北東部に位置し、紅海とアデン湾に接する国である（当時はフランス領ソマリ海岸）。「作家の日記」によると、遠藤がフランス留学に向かう際に乗船したマルセイエーズ号は、作品の設定と同日である一九五〇年六月二十八日にジブチに寄港している。遠藤は敗戦国の日本人であるため、マニラやシンガポールなどの寄港地では上陸を許されなかった

が、ジブチには上陸できている。この日の日記には、町の印象が以下のように記されている。なお、日記の引用は『遠藤周作文学全集』第十五卷（新潮社 二〇〇〇年七月）より、以下同。

朝、ジブチ原文ママ近くなる。

窓から初めてアフリカをみる。一草一樹だにない黄褐色の絶壁が百米前につづく。それから砂漠、感無量である。空がすばらしく青い。

七時、ジブチ着。

太陽が白く、その周りを赤黒いうん気が漂っている。重苦しい暑さだ。（中略）

誰もいない道、馬小屋のような家、光も建物の色も、海も、すべて強烈だ。まひるのさがり、死の街のようだ。

猛烈な印象を受ける。

この日の二時半には出帆しているのだが、翌日である六月二十九日の日記にも引き続きジブチの印象が綴られている。

ジプチの事はいつか書かねばならぬ。

多くの乗客にはおそらく興味ない、この何もない街ほど、心をゆさぶったものはない。ここから何かとりだせる。この死のまひるの街はたしかに何かの背景となるであろう。

ランボオを近くよもう。

恐らく——と、こう思う。今日までみてきたものは

ジプチの色彩、光の序曲だったみたいだ。

コロンボの自動車の中で、ぼくは汎神の世界がこの風土からどうして生まれるのかを考えた。しかし、どうもハッキリしなかった。だが、ジプチの中には虚無の色彩、光が逆にねぼりついているのだ。絶望の絵画の色彩。ランボオはそこに相応しかったのであろう。彼がここに来ねばならなかった気持、又、ここに来た時の気持を、僕は感じる事が出来る。

たった半日立ち寄っただけであるが、この地から大きな衝撃を受けたことが窺える。「何かの背景になる」という記述があるが、実際にジプチを舞台に本作を執筆していることから鑑みて、この印象は遠藤の創作意欲を刺激する類のものであったと言つていいだろう。コリンヌの物語の舞台

として、実際に流れた噂とは異なるジプチを選んだのは、この実体験あつてこそのものであつたわけである。

なお、日記に出てくるランボーは、一八八五年十一月下旬、アデンからジプチの港・タジュラーに移動し、そこでキャラバンの編成に当たっている。遠藤はランボーとの関連から、ジプチには元より関心を抱いていたのであろうか。

五、シモーヌ・ド・ヴオーヴォールについて

本作には、コリンヌのほかにもう一人、実在の人物の名が登場する。それが、結末部分に出てくるボーヴォールである。最後の一段落は以下のとおりである。

巴里に行つて僕はこの話を佛蘭西人たちにしました
が誰も信じてくれません。たゞ一人、あの「第二の性」
の著者、シモーヌ・ド・ボウヴォールといふ女の哲
学者が、この話をくひ入るやうに肯きながら聞いてく
れたのを思ひだします。

遠藤がフランス留学中に収集した欧文書籍は、現在町田市民文学館が所蔵しており、その書誌事項は久松健一監修

『町田市民文学館蔵 遠藤周作蔵書目録(欧文篇)——光の序曲』(町田市民文学館)とばらんど 二〇〇七年九月)で確認することができる。約七百冊のコレクションの中にはボーヴォワールの著作は七冊あるが、特に「第二の性」には多くの書き込みが残されている。目録に記載された久松氏の解説によると、*Le Deuxième sexe I: Les Faits et les mythes*, Paris, Gallimard, 1949 (邦題:『第二の性 1 理論編: 事実と神話』)には、「女性の心理を性(sexe)を中心軸に分析している箇所に遠藤の書き込みが集中。「男性は、女性の一面、母性的なものを恐怖する」(p.247)「肉欲の悲劇」(p.264)などと欄外にメモ書きがある」。また、「作家の日記」には、『第二の性』の読後感として、「この論文には、一方ではフロイト的な方法で、人間の性的無意識根源に迫りつつ、他方では、肉と死を丁度、リルケの考察のような段階で考えている」(一九五〇年九月二日)と綴られている。

何気なく添えられた最後の一文だが、美貌を持って生まれた「女性」であるがゆえに運命を翻弄されたコリンヌへの、同性からの第三者的な目線を取り入れたという点で、非常に重要な一文である。遠藤が、単にゴシップ的にコリンヌを題材にしたわけではないことが察せられる。

六、挿絵画家について

初出誌に掲載された挿絵を描いた画家は、松田穰(まつだ・みのる)。以下、松田の略歴をまとめておく。

一九一五年、埼玉県生まれ。東京高等工芸学校工芸図案科(現・千葉大学工学部)卒業。一九四一年、第六回新制作展への初出品初入選を機に、洋画家の内田巖に師事。一九四三年、第八回新制作展新作家賞(岡田賞)受賞。一九五九年、第二十三回新制作展新作家賞受賞。一九六〇年、第二十四回新制作協会会員に推挙される。三浦綾子「海嶺」(週刊朝日)、田辺聖子「求婚旅行」(サンケイ新聞)、松本清張「渡された場面」(週刊新潮)、山崎豊子「不毛地帯」(サンデー毎日)等、連載小説の挿絵も多数担当した。田辺聖子「道頓堀の雨に別れて以来なり」(中央公論)の挿絵の執筆半ばで筆を折り、一九九七年逝去。【参考文献・新制作協会図録委員会『第六十二回新制作展図録』(新制作協会 一九九八年)】

先に指摘した通り、「小説春秋」に掲載された「生きていたコリンヌ」の挿絵も松田が描いている。松田はそれ以前にも同誌に掲載された小説の挿絵を担当している(第二巻第一号掲載の横溝正史「黒い翼」、第二巻第二号掲載の藤原

審爾「復縁」等）が、コリンヌ・リュシエールが登場する遠藤の作品を再び担当することになったのは偶然ではないだろう。おそらく、編集者も「アフリカの體臭」の存在を把握した上で、同じ画家に挿絵を任せたのではないか。

最後に、描かれている挿絵について簡単に紹介したい。

「アフリカの體臭」には三つ(①～③)、「生きていたコリンヌ」には二つ(①～②)の挿絵が描かれている。

①舞台であるジブチを端的に表現したイラストで、タイトル下に置かれている。描かれているのは、頭を布で覆い、丈の長い服を身にまとった人物、照り付ける太陽とラクダ。

②本文中で「白豚のやうに肥え上がった年増」と表現される、娼館の白人の女。下着姿でタバコをくわえ、傍には酒瓶が置いてある。

③暗闇の中を逃げるコリンヌと、後を追う一人の男性。

①霊媒師のマダム・エスマンと、コリンヌと思しき女性のイメージ。

②暗闇の中を逃げるコリンヌと、後を追う二人の男性の影。

③と②では構図やコリンヌの服装等は異なるものの、両作品に共通する、ラストの印象的な場面が描かれている。

七、結びに

遠藤の発言は「伊達龍一郎」名義の作品が複数あることを匂わせているし、今回は発見に至らなかったが「島津貴之介」の方は大橋直矢氏が実際に掲載誌を目にしたと記している。遠藤が変名を用いて発表した作品はまだ存在していると考えられる。「アフリカの體臭」は初期作品として貴重なだけでなく、その後の純文学作品でテーマとする人間の哀しみ、悪の問題の要素が滲み出たもので、今後研究対象とするに値する作品と言える。未だ埋もれている他作品も、これに準ずるものであることを期待し、今後も引き続き調査していきたい。

(町田市民文学館ことばらんど学芸員)